キリスト教文学の世界
5

ベルナノス　ケロール

キリスト教文学の世界
5

ベルナノス
GEORGES BERNANOS

ケロール
JEAN CAYROL

主婦の友社

〈編・訳者紹介〉

森内俊雄　1936年生まれ。作家。
渡辺一民　1932年生まれ。立教大学仏文科教授。
上総英郎　1931年生まれ。文芸評論家。
弓削三男　1922年生まれ。早稲田大学仏文科教授。

キリスト教文学の世界　5
ベルナノス　ケロール

昭和五十四年三月三十日　第一刷発行

定価一八〇〇円

発行者／石川晴彦
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
郵便番号　一〇一
振替　東京二―一八〇番
電話　東京（〇三）二九四―一一一一（大代表）
印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

© SHUFUNOTOMO CO., LTD. 1979 Printed in Japan 0398—968339—3062

目次

ベルナノス
〈解説〉〈村〉の風景　森内俊雄　5
田舎司祭の日記　渡辺一民訳　15
人と作品……渡辺一民　298
ケロール
〈解説〉ケロール入門　上総英郎　207
他人の愛を生きん　弓削三男訳　221
人と作品……弓削三男　301

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ベルナノス

〈解説〉

〈村〉の風景

森内俊雄

キルケゴールの『哲学的断片』に、次のような一節があります。

「もともと大木の質たる樫の実を植木鉢にまいておけば、鉢はやがて押し割られてしまう。新しい酒を古い革袋に入れれば、袋は破れてしまう。それなら、もし神が人間という脆い鉢にご自身を植え込みたまうとしたら、どうなることだろうか」

これはあらためて言うまでもなく、神が人となり給うた奇蹟、託身の秘儀とご受難の意味について述べられた文章です。しかし、私には、これはまたベルナノスの小説『田舎司祭の日記』に捧げられてしかるべき美しい言葉の花束であるように思われます。何故なら、『田舎司祭の日記』の書き手であり物語の主人公である貧しい青年司祭の苦悩と挫折を通して射してくる大いなる慰めの光は、まさに「神という巨木が一個の人生の小鉢に植え込まれた」ことの悲惨と栄光に預って生まれてきていると思えるからです。

私はこの、陰気で沈痛な表情をたたえていながら、一方ではいぶかしいことに実に多弁な小説――熱にうかされたようなお喋り、あわれなロウソクの最後の焔のゆらめきに似た独白と対話に終始している作品を読み返すたびに、ドストエフスキイの『白痴』を思い出します。『田舎司祭の日記』の「わたし」と『白痴』の主人公ムイシュキン公爵との間には、互いに濃い血のつながりがあるように思えるのです。ドストエフスキイは『白痴』において、われわれ人類の歴史が持ち得た唯一無比の美しい存在――イエスの似姿を描いて見せました。しかし、小説の中では、人々はムイシュキン公爵の美しい心のゆえに傷つき、躓くのです。ドストエフスキイの物語は悲劇に終わります。ムイシュキン公爵の子供のような単純さは、人々を焼く火であり皮膚を切り裂く剃刀なのです。真理は、本来、鋭く明晰で単純なものなのでしょう。モーゼの十戒、山上の垂訓、あるいは福音書の記述がそうであるようにです。そして、人はしばしばその単純さに耐えることが出来ません。人間は真なるもの、善なるもの、美なるものを渇望しながら、何故かその存在をゆるし受け容れることが出来ないのです。しかもそればかりではありません。ドストエフスキイの物語では、存在自らも、ムイシュキン公爵自身も、傷つき敗れて人々の間から去ってゆくことになります。彼はわれわれの人間性の破れ目である深い傷口から立ちあらわれてきているのです。『田舎司祭の日記』の「わたし」もまた同じところから、相似た運命を荷いながら姿をあらわしてきているのではないでしょうか。

注意深い読者ならばお気付きになることだと思いますが、この『田舎司祭の日記』の中に見開かれているひとつの眼があります。登場人物たちの、まるで古典劇のセリフのような饒舌と長嘆息、いささか大袈裟な身振り、善に対しても悪に対してもこらえ性のない一種のさわがしさの中で、それは咎めるでもなく赦すでもなく、静かな、しかし、痛ましく濡れながら見開か

れたやさしい眼です。その眼差しは「わたし」の日記を介して、われわれのほうにも注がれてきています。とはいえ、それは作品の中で次のように書きとめられているに過ぎません。

「伯爵がいま出ていったところだ。雨にかこつけて立ちよったのである。歩くたびに長靴から水が溢れでた。彼の仕止めた三、四匹の兎が、獲物袋の底に、見ただけでぞっとするような血糊と灰色の毛の塊をつくっていた。彼はその袋を壁に掛けたが、彼が話しているあいだ、細紐の網目をとおして、その逆だった毛皮のあいだからわたしを凝視する、ひじょうにやさしい、まだ濡れているひとつの眼をわたしは見ていた」（P 89）

ベルナノスは、象徴的な文章を駆使することに巧みな作家です。ことに、この仕止められた兎の例に見るように、象徴を動物に荷わせることにたけた書き手であるように思われます。兎の眼は、「人間の臨終はまず愛の行為にほかならぬからだ」と言い、「すべては聖寵である」と呟きながら息を引きとっていったこの田舎司祭自身の眼でもあります。しかも、われわれは彼の眼を通して、いまひとつの眼差しを見出し、安らうことが出来るのです。それはパウロが、神の愚かさ、神の弱さ、と呼んだものの眼――「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」十字架上のイエスの眼であります。

ところで、私がこの『田舎司祭の日記』を初めて読んだのは、もう四半世紀も昔、私がまだ高校三年生のころのことです。私は新潮文庫版の木村太郎氏訳で読んだのですが、この大事な一冊は、いまだに失われることもなく手許にあります。私にとって、『田舎司祭の日記』は、トマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』のような意味合いを持つ一冊でした。折にふれては、読み返してきました。いま、文庫本の奥付けを見てみますと、私が持っているのは昭

和二十九年十月二十日発行の第三版ですから、私はその年の秋から冬にかけて、大学の受験勉強のかたわらに読んだことになります。『田舎司祭の日記』の主人公がアンブリクールの教区に着任してリール市で死ぬまで、物語の季節の推移と私の読書の時期が一致していたようです。翌年、大学受験のために上京するときも私はこの本をポケットに入れ、夜汽車の薄暗い灯の下で読んだことを覚えています。私は車窓に映る人影を見ながら、田舎司祭の「わたし」が覗きこんでくるような気がしていました。本との出会いは、不思議なものです。ベルナノスがこの『田舎司祭の日記』を出版したのは一九三六年――昭和十一年のことです。私はその年に生まれました。物語の「わたし」は、私と時を同じくして世に生まれ、私に出会うためにサン＝ヴァーストの丘から十八年の道のりを歩いてやってきた――いささか滑稽な思い込み方ですが、私にはそんなふうに思えていたものです。そして、実を言いますと、私はいまでもこの本を読み返しながら同じような不思議の思いにとらわれます。

ベルナノスは長篇評論『月下の大墓地』の中で、こう書いています。

「わたしが喫茶店のテーブルで書くのは、人間の顔を見、声を聞かないではわたしは長くを過せないからである。わたしはその顔と声とを気高く語り上げようと努めたつもりだ……わたしはいま喫茶店で書き、むかしは汽車のなかで書いたものだが、それは想像上の人物にだまされないためであり、見知らぬ通行人をちらと見ることで喜びや悲しみの適量に気づくためなのだ……すべて召命とは一つの呼びかけ――vocatus――であり、そしてすべての呼びかけは聞き届けられることを願う。わたしが呼びかける相手はもとよりそれほどたくさんはいない。その人たちはこの世の問題をなんら変えはしないだろう。だが、その人たちのために、その人たちのためにこそ、わたしは生まれてきたのだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

多分、私はベルナノスの呼びかけ、田舎司祭の「わたし」の呼びかけを聞きとることが出来た幸福な人間の一人なのでしょう。しかしながら、私が『田舎司祭の日記』を読むきっかけを得たのは、皮肉なことにベルナノスが作中人物の口を借りて、手きびしい批判を加えているポール・クローデルの本からでした。当時、私はクローデルを、町の古本屋で見つけた甲鳥書林の現代カトリック文芸叢書で、『マリアへのお告げ』とジャック・リヴィエールとの往復書簡『信仰への苦悶』の二冊を読んでいました。いずれも木村太郎氏訳です。『田舎司祭の日記』は、この『信仰への苦悶』の奥付け裏広告で知ったのですが、甲鳥書林版では手にはいらず、新潮文庫で見つけたというわけです。

さて、私は初めて『田舎司祭の日記』を読んだときの、驚きと喜びのないまざった動揺をいまだに忘れることが出来ません。私が中学、高校時代を過ごした学校は、カソリックのミッション・スクールでしたから、司祭職にある人たちは常に身近かな存在でしたが、『田舎司祭の日記』の「わたし」は、私の聖職者に対する浅薄な理解を打ち砕くに充分な人物像でした。「わたし」は、私が知っているどの神父にも似ていず、モノマニックで、霊的指導者であるためには沈着を欠いているように思えました。日常的な尺度、現実的な見地からすれば「わたし」は、まだ少年であった私の眼からしても、社会に対する適応能力を欠いた一種の性格破綻者、この世からの敗残の人間でした。ところが、作品の中で奇妙な転倒が起きているのです。この「わたし」は、人間としてのみじめさのきわみにおいて、ベルクソンが『道徳と宗教の二つの源泉』で言うところの、

「聖徒や偉人は他人に向かって何も求めない。しかも彼らは漁(すなど)るのである。彼らはあれこれと論す必要すらない。彼らがただいるというだけでよい。そういう人のいるということが、その

ま招きとなる」

ような「聖徒」であり得ているのです。私はこのパラドックスに、眼を打たれるような思いが致しました。しかし、私がほんとうにつき動かされたのは、このことばかりではありませんでした。『日記』の冒頭に、降りこめている灰色の雨の中から一つの〈村〉が姿をあらわします。それは「発育不全の絶望、絶望の頽廃した形態」である倦怠によって蝕まれた「わたし」の教区です。

「サン＝ヴァーストの丘に立つと、とつぜん、十一月の陰鬱な空のしたに、村が押しつぶされたような、みじめな姿をあらわした。雨はそのうえに一面に煙っていて、村は濡れそぼった草のなかにまるで疲れきった獣のようによこたわっていた。何と小さいのだろう、この村は！しかもその村がわたしの教区なのだ。それはわたしの教区だが、そのためにわたしは何もしてやれない。わたしは、それが闇のなかに没し消えてゆくのを悲しく見まもっていた……もうすこしすれば、何も見えなくなるだろう。そのときほど、村の孤独を、そして自分の孤独をいたましく感じたことはなかった。わたしの思いは、霧のなかで咳こむのが聞こえる、あの家畜たちにまでおよんだ。やがて、鞄を小脇に学校から帰ってくる小さな牛飼いが、水びたしの牧草地をよこぎって、暖かな、牧草の匂いのする牛小屋へつれもどすだろう……そして、村も、泥のなかですごしたいく夜かののちに、どこかあてにもならぬ、想像もできない隠れ家へと導いていってくれる主人を――たいして期待もせず――待っているかのようだった」（P 15）

私はこの一節を読んで、ショックを受けました。物憂い反芻を繰り返しながら、鈍重な、しかし、雨に濡れてすこし悲しげなけだものが、のっそりと立ち上ってくる姿が眼に見えるようでした。私はまだ十代の終わりにいながら、はやすでに、自分の内部に似たような〈村〉がよ

こたわっていること、そして、自分はこれからの人生においてもしばしばその村をかいま見ることになるであろうこと、そのために私は主人公の「わたし」のように、自分の無力を思い知らされながら、戦わねばならないことを予感したのだと思います。続いて、ここには緩慢な死の病い、倦怠についての鋭い考察があります。

「……わたしは人々が倦怠に蝕まれていることを考えつづけていた。むろんすこし反省してみてはじめてそれに気づいたのだった。すぐにはつかめなかった。いってみれば埃のようなものなのかもしれない。それを見もしないで歩きまわり、それでいてそれを呼吸し、それを飲みこんでいる。それほどに細かく透きとおっていて、噛んでも音ひとつ立てない。でもちょっと立ち止まろうものなら、それは顔といわず手といわずおおってしまう。この灰の雨をふりはらうにはたえず動いていなければならない。だからみんなじっとしてはいられないのだ。

おそらく、ずいぶんまえからみんな倦怠には慣れっこになっていて、倦怠が人間のほんとうの条件となっているのかもしれない。なるほど、その種子はいたるところに播かれ、適した土壌だとそこここに芽を吹きだすのだろう。しかし、人間がかつてこのような倦怠の伝染に、癩病に、気づいていたかどうか、わたしには疑問だ。この発育不全の絶望、絶望の頽廃した形態、たぶんそれは腐敗したキリスト教の醱酵のようなものにちがいない」（P 16）

「しかし人類が滅びなければならぬとしたら、それは嫌悪によって、倦怠によって滅びるのだろう。人間は、槲の木を数週間で指で苦もなく穴のあくぶよぶよの物質に変化させてしまう、あの眼に見えぬ菌によって梁がそうなるように、ゆっくりと蝕まれていくだろう」（P 105）

ベルナノスはまた、倦怠を癌にたとえているのですが、灰色の雨、癩病、槲の木の腐敗、癌というような、生理的な粘着力をもった比喩が私にはひどくこたえました。この『田舎司祭の

日記』は死の予感によって書きはじめられています。冒頭において、主人公の死病である癌を倦怠になぞらえているのは恐るべき照応です。まるで、物語全体が、大地によこたわった一本の腐木のような印象で、私に迫ってきたことを覚えています。そして、事実、この物語は「わたし」によって、そんな腐木の上で考えつかれた日記の試み形式で始まっているのです。

「たいてい毎日、わたしは司祭館へ帰るのにわざわざデーヴル街道をまわる。雨が降っても風が吹いても、坂のうえで、いく冬もまえから忘れられているのだろう、腐りかけているポプラの倒木に腰をおろすことにしているからだ。やどり木がその幹を莢のようにくるんでいて、それは、そのときどきのわたしの思いや空模様にしたがって、醜くも、美しくも見える。この日記を思いついたのもそこでのことで、ほかのどこででもそんなことは考えつかなかったろうと思う。森と、生垣に区ぎられ林檎の樹の植わっている牧草地ばかりのこの地方では、村全体がまるで掌のくぼみに吹き寄せられたように望まれるこうした見晴しのよい場所は、他には見つけられないだろう。わたしは村を眺めるが、まだ村のほうでわたしを眺めているように感じたことはない。そのくせ村がわたしの存在に気がつかないようにも思われない。いってみれば、村はわたしに背を向け、猫みたいに眼をなかば閉じ横目でわたしをぬすみ見ているのである」(P 39)

つまり、倦怠の比喩を荷わされた、腐りゆく倒木の上での思い付きである日記をつける決心から、この物語は始まっているのです。しかも、その「わたし」がここから見渡しているのは、彼がそのために殉じてゆくことになる、倦怠によって蝕まれた彼の教区、彼の村なのです。まだ高校生であった私は、「わたし」とともにこの村の展望を試みながら、ひそかに恐れていました。いまだ何ほども生きていず、生の何たるかを知らずにいながら、私は自分のいの

ちによってあがなわなければならない〈村〉、人生がその巨大な掌のくぼみに隠している、生存の倦怠、絶望をはやばやと見たように思ったからです。

そして、私の予感は当っていました。倦怠といい、絶望といい、いささか言葉の威力を失った現代文学がもてあそぶ常套語でありますが、それは巧みに姿かたちを変え、その後の私の生活の中に忍びこんできました。これまで、その〈村〉は、私とともに在りましたし、これからも在るでしょう。〈村〉をまえにしての「わたし」の呟き――、

「わたしは日ましに、実際生活のごく初歩的なこまごました事柄についての自分の無知におどろいている」（P 34）

「――生きていかなければならない、というのが、ぞっとするんです！　と、思わずわたしはこたえた。そうお思いになりませんか？」（P 59）

「われわれは人間をまえにして、人生をまえにして、何と無力なのであろうか！　なんという道理にあわぬ子供だましなのだろう！」（P 62）

これらの呟きは、生を望見しながらの私自身の無力感の呟きでありましたし、現在の私の変わらぬ呟きでもあります。しかしながら、同時に、人が生きてゆくことの真実の希望を汲み上げるのは、生に対する自己の貧しさ、無力さについての自覚の深い井戸の底からであることを教えてくれたのも、この『田舎司祭の日記』なのです。私はかつて、大きなよろこびを持って読んだ、次のような言葉を決して忘れることが出来ません。

「それでもわたしは信じるのだ。そのような貧窮、みずからの名まで忘れ、もう求めず、頭も働かせず、茫然とした表情をどこへでもむける貧窮は、いつかイエズス・キリストの肩のうえで目覚めるにちがいないと」（P 47）

『田舎司祭の日記』は、灰色の雨に降りこめられた晩秋のたそがれから始まって、酷薄な真冬の朝に終わる暗い夜の小説です。また、私はこの小文の初めに、陰気で沈痛な表情をたたえていながら、一方ではいぶかしいことに実に多弁な小説——熱にうかされたようなお喋り、あわれなロウソクの最後の焔のゆらめきに似た独白と対話に終始している作品だと書きました。

しかし、暗夜は美しく痛切な夜明けにつながり、作中人物の多弁も、実は夜明けに先立つ葉群れの幸福な予感に充ちた大きなざわめきなのです。この物語は終わりに近づくにつれて、簡潔で鮮烈な朝の描写を重ねながら、完結へと導かれているのです。私はこの作品を読み返すたびに、イエズス・キリストの肩のうえでの目覚め、私のやがての朝のことを考えます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com